

## 大償神楽狂言「金堀り」の始まり

八木沢のノウギョウ（納経）寺があったという近くに、広くて平らな場所がある。

ここ昔、鉱山でたくさん金が採れたときに、鉱夫たちが酒盛りをする場所であった。

あるとき、金がたくさん採れて酒盛りをすることになった。準備の最中に、鉱夫の若者の一人が、  
「俺は酒盛りのときに踊りでえ」

とみんなの前でゴンボを掘った（わがままを言うという意味の方言）が、誰も太鼓をたたく者がいなかった。そのうちに、ついに見かねた親父は、

「なんたら俺ほの馬鹿息子、そなたに踊りでなら、俺が太鼓ただぐ」

と言って、結局、若者の親父が太鼓をたたくことになった。この踊りは鉱夫たちの好評を博し、やがて大償神楽の狂言「金堀り」という演目にもなった。ただし、最初はこの踊りも神楽的一幕としては扱われないものであったが、いつの頃からか一幕として演じられるようになった。

このようにして、八木沢金山の鉱夫の踊りが、大償神楽の演目として取り入れられてからも、この踊りだけは、息子が踊った時には親父が拍子を取り、親父が踊った時には息子が太鼓をたたく、という形で演じられたもので、必ず親子でなければならなかったと言われている。今ではそんなこともなく、誰でも演じることができるようになったのだという。

その時の「金堀り」踊りに関してはこんな話もある。

昔の手ぬぐいといえば、今のように白いものではなく、紺が手ぬぐいの色であった。若者は踊るときに、どうにかして派手にしたいものだと考えた。そこでフンドシを取り出して、手ぬぐい尺に切り、黒豆を煮てうるかし、それをフンドシの上へ置いた。そうしたら、一晩のうちに派手な絞りの手ぬぐいができたので、それをかぶって踊った。これが絞りの手ぬぐいの始まりであるという。

（八木沢・松田ハツヨ）